

今村欣史

承前。

書齋には書額や絵画が飾られていたが、中に「オッ」と思う版画があった。わたしも全く同じ版画を自分の書齋に飾っている。

「桜」という先生の詩を版画家の高橋幸子さんが彫ったもの。縁あってわたしも購入したのだった。因みにわたしのは2/100である。百枚刷ったうちの二番目ということですね。



☆ ☆
「これです」と言って初美さんが見せてくださったのは陶板詩。

わたしには悔いがある。

もう30年近くも昔のことだ。

宮崎修二朗翁が、香川県白鳥町での「桑島玄二詩碑除幕式」に誘ってくださったことがあった。しかしそのころのわたしは生活に追われていくことができなかった。今になってみれば、なんとしてでも行っておけばよかったと思っている。

その除幕式には杉山先生も参加され、宮崎翁とともに講演をなさっているのだ。そのテープ起こしの冊子をわたしはいただいているが素晴らしい内容だ。

除幕式のパンフレットには詩碑の写真が載っている。それが陶板の詩碑なのだ。

その詩碑を現地で見た杉山先生は「これはいいですねえ！」としきりに感心しておられたとのこと。その様子を見た宮崎翁は後に、杉山先生の詩を刻した陶板を先生に献上されたのだ。いつでも詩碑が建てられるようにと。

初美さんが見せて下さったのはその陶板だ。目立たない地味な陶板である。杉山先生の詩碑にするにはびつたりの趣がある。さぞ先

生もお気に入りだっただろう。

☆ ☆
だが、この陶板は今も詩碑にはなっていない。

杉山先生の詩碑は、先生の青春の地、島根県松江市や、兵庫県播磨中央公園にあるが、この陶板での詩碑が建つのも見てみたいものである。

詩は「夜更けの坂」。

夜更けの坂を誰かが駆け降りてくる

わが子の死期迫るしらせに 病院へ

この坂をとぶやうに駆け降りたのも
こんな夜更けだった

あの人にも何かよくないことが起こったのか

くらい思出にうつむく私をよぎって

(ああよかった)

いま風のやうに過ぎたのは
はしやぐ少女の笑ひ声とクリーム匂ひ

杉山先生によるこの詩の直筆原稿をわたしは宮崎翁からいただいている。翁は、陶板の原稿にするとは言わずに杉山先生に依頼したもの。友情である。

それは額に入れて今もわたしの書齋に飾っている。

詩の背景は芦屋神社近くの坂道。先生の人
生の中で重要な意味を持つ場所である。

この陶板での詩碑が、芦屋神社の境内に
も建立されればいいのだが。

一応こんながあるということをごここに記
しておく。



了